

男子部中等科

「戦国大名と平和」

角田 望

「戦国大名」と「平和」はその関連が未知であり、どうして繋がるのか分からないであろう。しかしながら、百姓の側から捉えるならば、戦国大名は領国経営において平和を実現する存在であり、その取り組みにおいて飢饉を克服するシステムを形成したことは、中世の戦争の克服であった。それは天下泰平とされた江戸期の平和の基礎を造るものであったのである。

川越をケーススタディーとして考える場合、戦国期には三十三郷とされる村落が城郭の周辺に展開していたことが確認できる。板碑を史料として使うことが可能であるならば、15世紀の結衆板碑は多くの俗人が名を連ねており、村落の成長を確認できる可能性がある。

I. はじめに

戦国大名は、多くの「歴史好き」の子供にとって魅力的なテーマである。そこで戦国大名を民衆史的に読み解くことを考えた。池享『戦国大名と一揆』（吉川弘文館 2009）、久留島典子『一揆と戦国大名』（講談社 2001）を課題図書として展開を考えていたが、2学期になり方針を転換した。それは黒田基樹『百姓から見た戦国大名』（ちくま新書 2006）の方が、簡潔で生徒にも理解しやすく、本質的な内容であったからである。残念ながら歴史研究の希望者が3人しかいなかったが、ゼミナール形式としては少人数が好都合と考えて黒田氏の本を購入してもらい、プリントを作成して理解を深めるかたちで学びを深める段取りであった。

II. 準備期間

準備期間になってみると、中等科には補足的な説明が必要であり、輪読しないと本の理解は難しかったので時間がかかった。それでも3人は「戦国時代好き」であるだけに理解が早く興味をもって取り組むことができた。

次の問題は、本で学んだ内容を、どのように「展開」するかという問題である。準備期間4日目に（11月2日）、戦国大名の支城である川越に出かけた。市立博物館では学芸員と問答することもできて有意義であった。また、図書館では戦国時代の資料をコピーすることができた。当時の史料として板碑を取り上げたが、これまでの報告会で用いた板碑拓本が非常に役に立った。生徒は地元の

中世にも関心に向け、解散後に多聞寺や大円寺のフィールドワークも行った。

パワーポイントの作成、報告文の作成についても、落ち着かない状況はあったが、順調に進めていった。大きな問題であったのは、中心であった高等科1年の生徒が報告に参加できなくなったことであった。中等科2年の2人は、最終的にその報告を引き継いで懸命に努力することになった。リハーサル（11月8日水曜）にはなんとか内容を固めることができ、最後に感想を加えて報告内容としては完成した。

III. 報告内容

1. 中世の飢饉と戦争

戦国大名は、戦乱を展開し天下統一を目指した英雄として捉えられることが一般的である。しかし、時代背景として当時「飢饉の時代」であり、不作がそのまま餓死につながっていたことは知られていない。江戸期の元禄時代以降にはじめて、「常態的な飢饉」を克服できたのである。

室町期に惣村が成立して百姓が自立すると、飢饉におびえる惣村は隣村との争いを起こし、刀などの武力を持つ農民による「村の戦争」が日常化することになった（この状況は西国において確認されるが全国的であったと考えられる）。領主もこの戦争に巻き込まれる結果、内乱状態に陥るのであり、それが戦国時代の実態であったのである。したがって、戦国大名は、そのような村の戦争に答えるべき課題を負っていたのである。

2. 平和を実現する戦国大名

領主を百姓の側から捉えるならば、村の戦争を収めてくれる存在であり、そのような支援に対して年貢を払っていたことが確認される。いわば「村こそ、領主を創り出す主体」（黒田基樹、前掲書 91頁）であったのである。これは驚くべき事実であるが、このような「下剋上」理解によって初めて、時代の潮流が戦国大名という権力と繋がることを深く理解することができるのである。

戦国大名は村の争い（相論・合戦）を裁く存在であった。それは武力を戦国大名が独占することと表裏一体であり、「喧嘩両成敗」という原則は家中とされた家臣ばかりではなく、百姓にも適応されたのである。

「徳政令」は、室町期に百姓が幕府に要求したものであるが、戦国大名が発布していたことはあまり知られていない。村々を飢饉から救済するために、不作に対して年貢を引き下げる徳政を大名が出したのであり、村の「成り立ち」を助けることは大名の義務であった。

さらに「目安箱」も大名と百姓を直接繋げるものとして設置された。江戸期の改革のなかでは知られている政策であるが、年貢徴収についての不正、いわば中間管理職である家臣への不満を直接大名が取り上げることで百姓の保護がはかられたのである。

最後に土木事業に戦国大名が乗り出すことになる。具体的には河川の氾濫による洪水に備えるための堤防の造営などが知られている。これも飢饉を回避するための政策であり、村の利害を領国全体の力で救援しようとするものである。現在の公共事業の先駆けと捉えることも可能である。

以上のような「領国経営」を大名が展開することになったが、これに対しては百姓が答えることが必要であった。

百姓は、年貢を払うことでその支配を承認した。さらに労役としては、戦時には避難所となる城の維持のための土木工事（壁の改修）を請け負っていたのである。もちろん、足軽や雑兵として他国へ遠征に出ることもあったが、それで他国を掠奪することで飢饉の打撃を緩和する政策でもあったのである。

戦国大名と百姓が、このように直接的な繋がり

をもっていたのである。「下剋上」の実態は、このような百姓の要求に答えられる大名のみがその領国を維持、発展したことにある。その点では領国の安寧、すなわち平和をどのように実現できるかという点が戦国大名の「器量」とされたのである。もちろん戦国大名は他国に侵略し、戦乱を引き起こす主体でもあったが、百姓の側からすなわち内側から見ると、村の戦争を克服し飢饉を克服するというかたちで平和を実現する存在であったのである。

III. 川越の戦国時代

黒田氏の叙述を机上の理解のみに留めず、北条氏の重要支城である川越に焦点を当てケーススタディを行なった。

1. 戦国時代の村落（郷村）

「川越三十三郷」というのが川越城を支える戦国期の村落である。「小田原衆所領役帳」という家臣の所領の台帳を基に、村落の場所を地図上に落とすことができる。そこからは24の村落を確認したが三十三郷としては13のみを確認できた（三十三郷は坂戸、城ヶ島、日高に広がっていた）。川越城の北を半円形に走る入間川の流域に多くの村落が展開しているのは確かである。しかしながら、村落（郷村）の位置は現在の小字を根拠としており、確定できないことも確かである。

2. 結衆板碑と村落の成長

中世の供養塔である「板碑」は、村落の形成を考える場合、紀年が刻まれているだけに重要な史料となるはずである。しかし、板碑は出土地から移動している可能性があること、板碑の碑文からの情報では状況を説明できないことから考古史料としても歴史史料として活用されてこなかった。ここでは「結衆板碑」に着目したい。

川越では南北朝期に川越城下の天台宗寺院（喜多院）における僧侶の結衆を記念する大型板碑（暦応五年1342・延文三年1358）が有名である。しかし、ここで注目したのは15世紀の百姓の結衆板碑である。紀年の明らかな9基の結衆板碑のうち、7基が1445～1485年に集中している。この結衆板碑には「月待」によって立てられ、「逆修」として自らの供養を目的としている点、さらに10人以上の俗名（百姓）を刻んでいる点において共通して

いる。したがって、これらの板碑を、村を越えた百姓の結衆であると理解するならば（仮説の上に立つことになるが）、15世紀後半という室町末に村落をまとめた郷村の成長を現すものであり、換言すれば領域権力の成立を示していると評価することが可能ではないだろうか。

特に注目されるのは最古（1445）の結衆板碑が上戸の常楽寺に保管されていることであり、川越北西のこの地では川越氏の館が確認されている。その近隣、入間川の反対側（上寺山）の釈迦堂（現、観蔵院）からは1482年紀年の結衆板碑が確認されている。

もうひとつ注目したいのは川越東部の古谷である。古谷上の善仲寺には1446年を刻む結衆板碑が確認される。その点では室町末からの村落の成長を確認できるかも知れない。ところが戦国期の集落としては、その南にある古谷本郷が「所領役帳」から確認できる。この古谷本郷の灌頂院には1534年の結衆板碑が確認できるのである。いわばこの2基の板碑から、室町期の村落から戦国期の郷村への移行を読み解くことができるかもしれない。

これらの推論を詰めるためには、川越周辺の結衆板碑の事例を集めること、文献史料を探索することが考えられるが、その道は容易なものではないであろう。

IV. 生徒の感想

今回の学業報告会も、担当教員である角田の研究と生徒の研究という2本立てで進んできた。中等科の生徒にとっては、理解が容易でないテーマであったが、柔軟な理解力を発揮して調べまわることができた。2人の感想は次の通りである。

林一大名と百姓は支配し、支配される関係だと思っていましたが、本を読み、平和な関係が築かれていました。争いのうらで平和を築いていたとは、とてもスゴイ。今の平和は戦国大名が導いたものだと実感して生活したいと思います。

増淵一僕は歴史が好きなのでこのグループに入りました。戦国時代のことも好きでしたが、これまでは戦国大名の目線で見えていました。このグループでは百姓から戦国大名を見ることで、戦国時代をより深く理解できました。違う目線から物事を見ることも大切だなと思いました。

<参考文献>

- (1) 黒田基樹『百姓から見た戦国大名』ちくま新書 2006年
- (2) 川越市立博物館『戦国時代の川越』2013年
- (3) 川越市立博物館『中世びとの祈りⅡ—板碑のある風景』2002年
- (4) 『川越市史 第2巻 中世編』1985年
(2017. 11. 13. 脱稿)

V. その後の課題

報告会の終了後、11月23日には生徒と河越館の所在地とされる常落寺を中心にフィールドワークを継続した。12月9日にも生徒と常楽寺に赴いた。この時は寺のご協力を得て、この地域で最古の結衆板碑の拓本を採ることができた。技術的には未熟な点もあったが、生徒にとってもよい体験となったようである。地道なフィールドワークを続けて知識を蓄積することが、川越の中世的展開に迫ることになるであろう。



<文安二年銘（1445）の結衆板碑>

月待供養として15人の法名を刻んでいる。
高さ83センチ、幅34センチ。中央で分断。